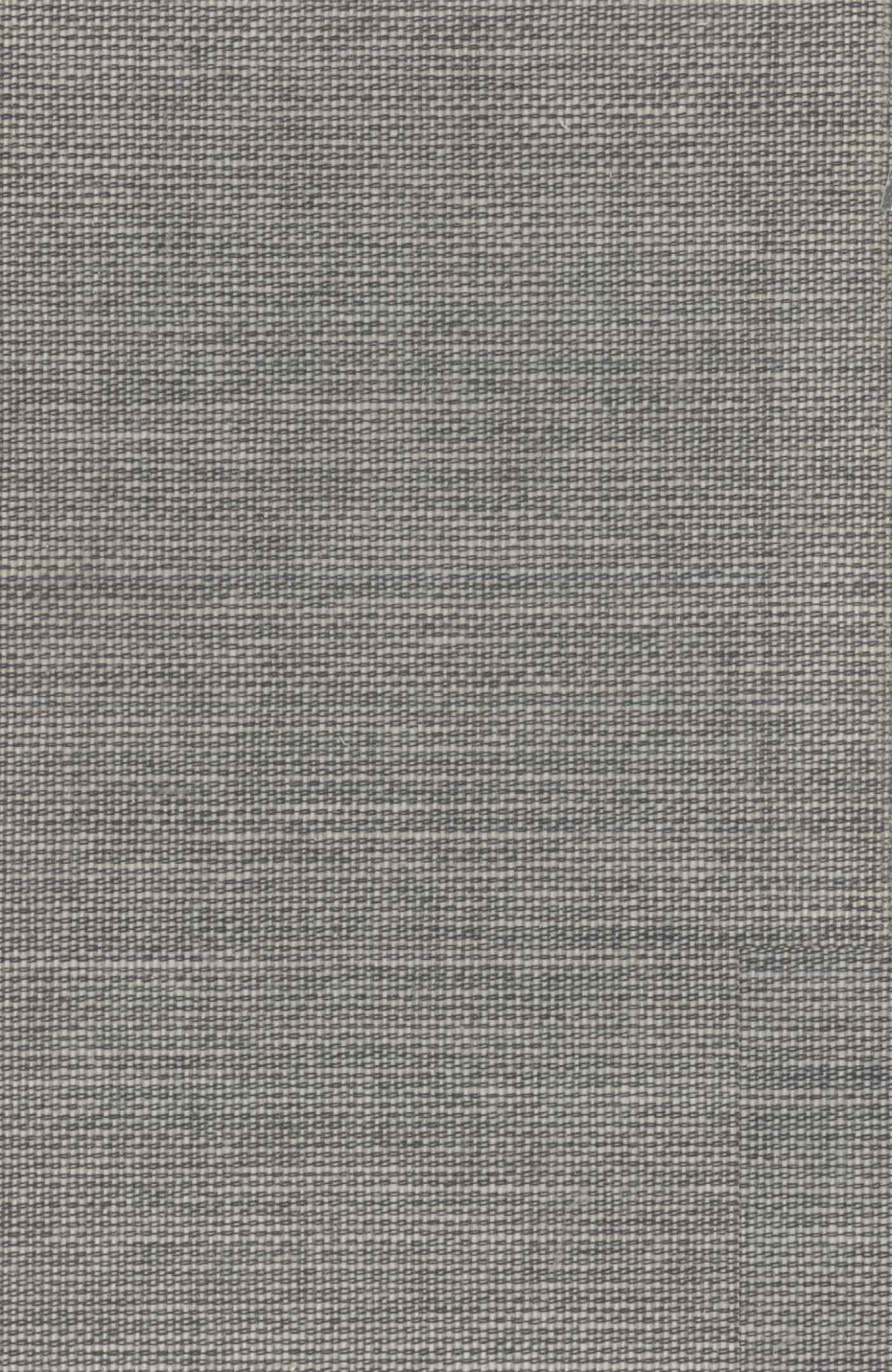




續高見順日記

才七卷

勁草書房

続 高 見 順 日 記 第七卷

1977 年 6 月 17 日 第 1 刷発行

著 者 高 見 順

発 行 者 井 村 寿 二

発行所 東京都文京区 振替東京5-175253 株式 勁草書房
後楽 2-23-15 電話(03)814-6861 会社

落丁・乱丁本はお取りかえします。

© 1977 Jun Takami

* 定価は外函に表示してあります。

三陽社印刷・牧製本

Printed in Japan

0395-880000-1836

続高見順日記 第七卷 目次

ソ連・パリ日記

ソ連日記

昭和三十三年四月二十七日～五月二十一日

パリ日記

昭和三十三年五月二十一日～六月二十一日

東南アジア再訪メモ

ビルマ・パキスタン・インド・タイ

昭和三十年二月十四日～三月十二日

ソ
連
日
記

——昭和三十三年四月二十七日～五月二十一日——

昭和三十三年（一九五八年）、ソ連作家同盟より、日本文芸家協会に、文学者を招待したい旨の正式申し入れがあり、それに応えて、第一回訪ソ日本文学代表団が選ばれた。メンバーは青野季吉（团长）、阿部知二、高見順、文芸家協会の堺誠一郎の四人。一行は同年四月末から五月末までの一カ月、ソ連各地を歴訪。なお、パリで解散のあと、高見のみ、パリを中心に約一カ月滞欧した。

四月二十七日

随分いろんな人が送ってきてくれた。

十二時十三分 羽田発。

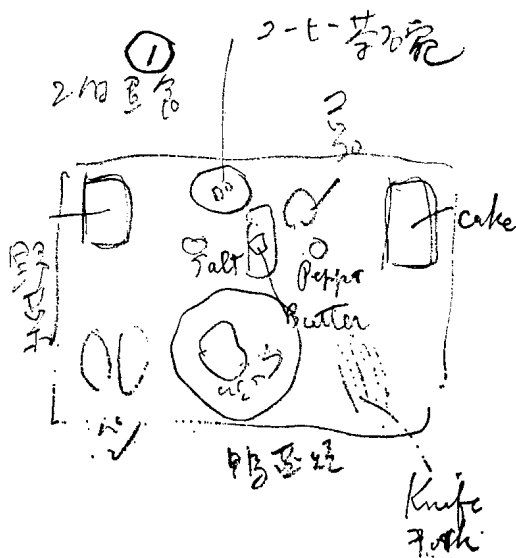
日本女性のスチュワーデスが乗っている。十時
間十五分後にアラスカのアンカレッジにつく予定
という。

東和商事の川喜多社長、フランスに留学する慶
応大学の永戸氏（故永戸俊雄氏子息）等も一緒。
日本人の同乗客が多い。

二時昼食。太平洋の海上。

「パン・アメリカン」機はたしか、すべて紙の
容器に、ナイフ、フォークも軽いそれだったが、こ
れはガラス製のコップ、陶器の皿といった工合。

鴨の蒸焼に野菜サラダ。——食前にアペルチー



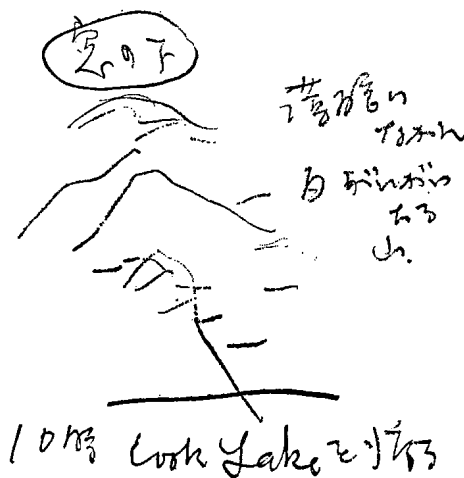
フのチンザノをのむ（これは有料、八〇フラン）。

アリニューシャン列島の海に入りかける前に、International Date Line がある。私はしかし時計をそのままにしておいた。

夕食 伊勢エビ。腹にたまらない。肉の一皿がほかにほしい。

九時四十分（日本時間）、暗い水平線のかたが明るみかけた。夜明けの感じで、どんどん水平線の薄明が空にひろがって行く。窓の下をのぞくと、海でなく陸上で、暗い陸上に灯が見える。海とばかり思っていたら、アラスカに入っていたのだ。

薄暗い窓の下に、雪で真白の山が見える。十時、広大な入江を渡る。湖沼地帯を行って十時四十分、アンカレッジに着く。ローカル・タイムは夜あけの五時三十分。



(註||次の何篇かの詩群は、アンカレーヅに着く迄の機内で書いたものらしく、メモの末尾に、書かれています。明らかに未定稿のものと思われるが、一応、原文を追って、書き写しておく。)

*

日本よ しばらくさようなら

ツギハギだらけのやうなタンポ

小さな波頭

売文生活

しばらく君らと別れる

私はもう海の上 雲の上にある

私の上にはまだ雲がある

雲の上には海の青さの天がある

青い無限がある

結局はそこへ私も帰るのだが

まだ帰れない ソ聯へ行く――

私は下界の一部へ行く

*
*

空の涯に

陸が見える

陸でなく雲である

氷塊が見える

氷の陸地が見える

*
*
*

雲は何かの指紋なのだ

天の指紋が雲なのだ

人間よ

お前の指の

お前だけの指紋も

お前の一生だけのものだ

瞬時にして消える雲のやうな一生の

人間の指紋がみんな違ふやうに

雲はかならず違つてゐる

* * * *

窓があつてもひらいてはならない ひらけない
水族館のやうなこの二重窓はひらけない

太陽と雲

すでに僕らは魚類である

6時

東の空が夜明けのやうに明るい
海はもはや海ではない

* * * *

紙のコップの底にコカcolaが残つてゐる

膝かけの赤い縞の上に憂愁憂鬱が載つてゐる

6時の空は
 海はもはや海ではない
 紙のコップの底にコカcolaが残つてゐる
 膝かけの赤い縞の上に憂鬱が載つてゐる

そして僕はエア・フランス機に載つてゐる

そして僕ののりつけねばならぬ時間は

僕を抽象的な存在にしようとしてゐる

僕も抽象と化したいのだが

アラスカ基地へと僕は運ばれてゐる

* * * * *

暗黒のなかにまたたいてゐる

アリユーション列島の空の星

暗黒の眼

* * * * *

カナディアン・ユーコンの

自然の大河の

アブストラクト的彎曲

人工美は

自然美をしよせん出られないのか

そして僕はエア・フランス機に載つてゐる
そして僕ののりつけねばならぬ時間は
僕を抽象的な存在にしようとしてゐる
僕も抽象と化したいのだが
アラスカ基地へと僕は運ばれてゐる
暗黒のなかにまたたいてゐる
アリユーション列島の空の星
暗黒の眼
カナディアン・ユーコンの
自然の大河の
アブストラクト的彎曲
人工美は
自然美をしよせん出られないのか

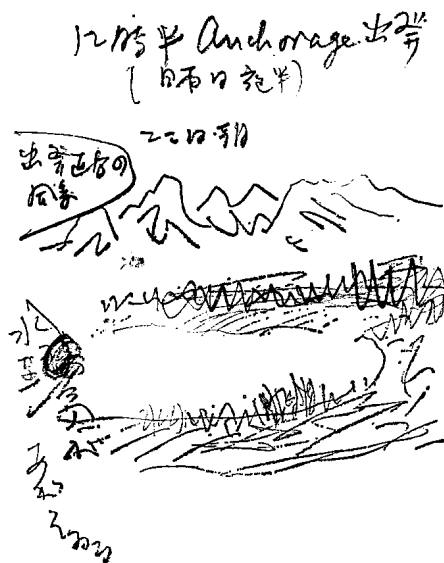
抽象絵画のやうに美しい河に沿つて

この荒涼たる自然のなかに

人工の道路がしかし作られてゐる

アラスカのアメリカ軍基地と聞いていたアンカレッジは雪に蔽われたところかと思つていたら、北海道の北部か、満洲といった感じ。そう寒くはない。国際空港と英語で書いてある。控室でアメリカ軍の女士官から旅券等のしらべをうけたのち、暖いコーヒーをのむ。ドーナツ等の菓子もある（ここで機長等交替、日本のスチュワーデスも違つたひとにかわる）。

飛行場をぶらぶら歩くと、ゴミ捨て場に捨てた豆が芽を出している。あたりは一面の枯草。事務所の背後に見える山は白く雪をいただいている。そう大きくないワイルドの森——寒くないと言つても、植物は育ちがたいと見える。



北

川喜多さんから、同乗のフランス人はエア・フランスの招待客が多いと聞く。北極航路を宣伝しているのだ。

十二時半 アンカレッジ発。

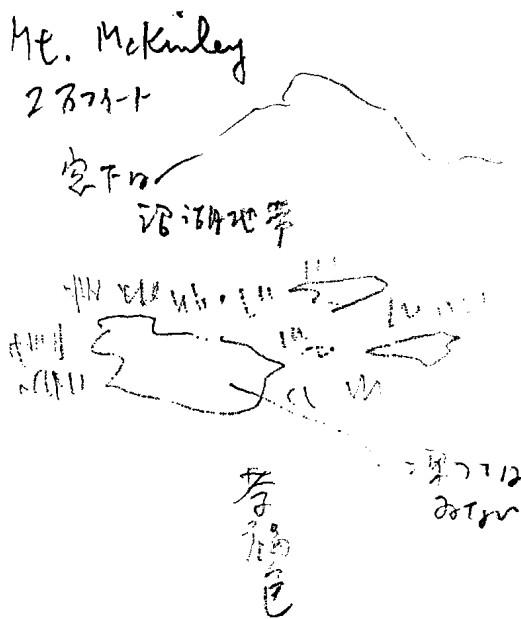
日本は夜なかだが、ここは朝。褐色の林に囲まれた沼から水蒸気があがっている。

左窓にマッキンレイ山を見る。窓下は湖沼地帯。アンカレッジにつくとき同じような湖沼地帯が見え、いずれも水が凍っている、薄暗いのでそう見たが、今見る湖沼は凍ってない。湖沼の周囲は茶褐色の林（冬は零下四〇―五〇度だという）。

人家が見えて、はっとする。こんなところにも人が住んでいるのだ。

一時半 窓外の景色が変わった。原始林が黒く見え、地面は白い雪。

北極は烈風のため、航空機の進路を変え、カナディアン・ユーコンを行くとフランス人のスチュワードが言う。北極が見られないかとち

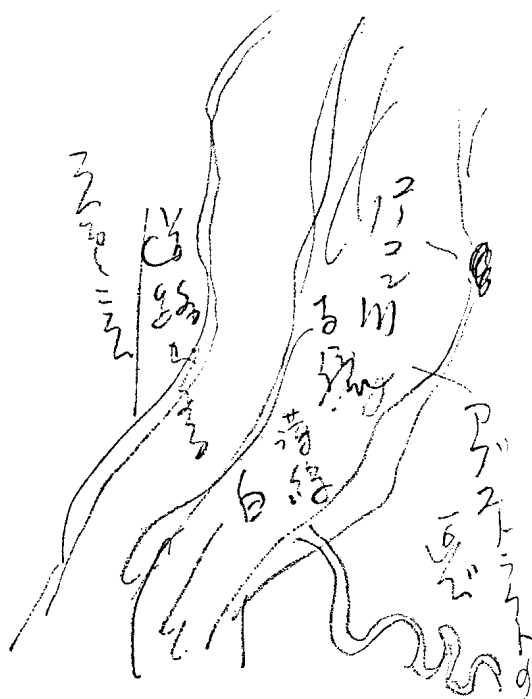


よつとがっかりする。

アラスカのユーコン河の上流（あるいはそれにそぐ支流）と思われる大河が見える。殆んどは氷結していて、それが美しい淡緑だったり、いろんな色になっていて、アプストラクトの画を見るようだ（色および線が——）。

インドのガンジス河（？）東パキスタンにそぐ河）のデルタ地帯を機上から見たとき、やはりその美しさがアプストラクト絵画に似ていて、一種の感慨を抱かせられたものだが、暑い南方、寒い北方の両方で、はしなくも同じ風景を見たのだ。そのことを考えていると、川に沿って道路が走っているのが眼に入った。人工と自然の問題。

一時半 雪に蔽われた山、山肌は黒褐色（圭角の山からなだらかな山に変わっていた）。





山は朝の
里は夜
雲

見える。

間もなく窓外は夜になる。

ふたたび寝る。

おきると朝食。トマト・ジュース 卵とハムといったもの。パン二つ（バターとジャム）コーヒー。

十二時二十五分（パリ時間、朝の四時半）水平線が白みかける。

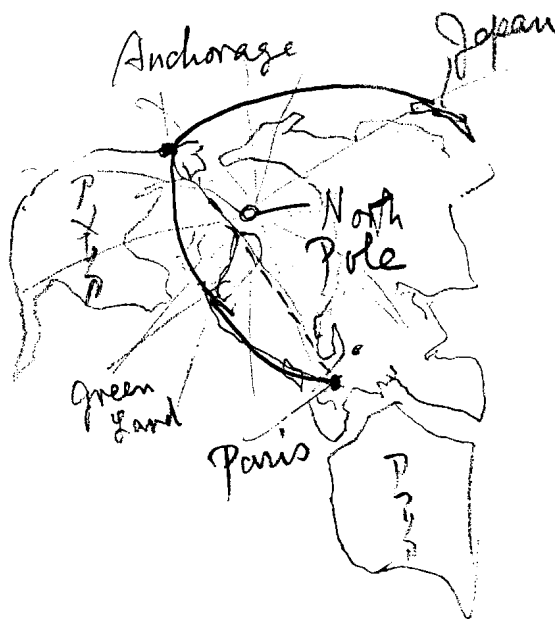
窓からのぞくと、暗い空の星が走っている。飛行機が停止していて、逆に星が動いている感じなのだ。

二時半 まだ同じ山の風景がつづいている。

スチュワーデスに言って、作って貰ったサンドウィッチを食べて、ねる。日本時間だと夜なかの二時半だが、窓外は明るい朝の風景。カーテンをしめて、みな寝る。

八時 眼がさめる。パリ時間だと夜なかの十二時すぎだと言う。なにがなんだか分らなくなった。飛行機はグリーンランドの西側を行く。外界は零下45度だという。窓の外に（二重窓の外に）、うつすらとだが、氷の結晶が小さくついているのが見える。

十時頃から（東京は朝の十時、パリは夜なか）窓の外が夕暮の感じになる。窓の下は氷の海、氷原のところどころに恐ろしい亀裂が



水平線に夜明けの青色が見え、やがて赤みがさしてくる。
アンカレッジからすでに十二時間、しかし、あつという間を経ている。
東京からアンカレッジの方がながかった。

一時 水平線の赤みがまし、窓の下をのぞくと、薄暗いなかに陸地が見える

気がした。阿部

君(註「阿部知二」)

がのぞいて雲だ

という。いや陸

だろう——「呉

か越か」と阿部君が言う。永戸君にのぞ

いて貰うと、やっぱり雲だろうと言う。

明るみがまして、雲と分る。太平洋の

上の雲だ。

一時半 水平線の赤み消えて、全体が

明るくなる。星の光も消えた。

見渡すかぎり、大雪原のような雲。そ

の雲の、水平線に近い手前のところに、

ぽっかりと赤い雲が見えた。朝陽の赤い

光が下からさしたのだ。

